このまち感じよう!
ここずたうん
大野南地区を楽しく育てる情報紙
発行：NPO法人 ここずっと 2018 April
No. 16

わたしたちには まだ出会っていないひとがいる。
レモンタイムとケアホーム。来夢の前に広がる林（2018年3月15日撮影）

社会福祉法人 県央福祉会は、2017年6月現在、県内に116事業所、正職員・パート含め1600人の方が働いている神奈川県トップクラスの福祉事業者です。うち相模原市内には33か所の事業所を展開している、まさに私たちのまちの福祉の担い手です。

理事長の佐瀬睦夫さんは、自閉症の子どもたちと出会って1975年に「子どもの生活相談室」を開設。以来、必要とする人たちに応えるうちに事業所が増えたと言います。現在では、右の写真・佐瀬さんの後ろにベトナムの絵が見えるように、活躍の場を東南アジアにも広げているそうです。昨年、秋分の日、相模原市産業会館で開かれた津久井やまゆり園事件を考える集いで強い口調で地域移行※のご意見を述べられていた佐瀬さんの記憶を頼りに、大和駅近くにある県央福祉会の事務所を訪ね、お話を伺いました。

こころ インタビュー

社会福祉法人県央福祉会・佐瀬睦夫理事長

だれでも そのひとらしく 生きられる暮らしを

――津久井やまゆり園の事件報道を福祉に従事する者としてどのようにお聞きになりましたか？

佐瀬：「入所施設は解体すべきだ」との思いを強くしました。北欧をはじめヨーロッパでは施設解体が進んでいるのに、日本は遅れています。施設というのは、プログラムが決まっていて、どんなに職員が入所者のためにと頑張っていても勤務の中の頑張りで、家庭とは言えません。ヨーロッパのようなもっと小単位のグループホームで、好きなものを好きな時に食べることができる、プログラムではない自分の望む余暇活動ができる、具体的にはその人専用のトイレとシャワーがあるとか、そういう家庭の暮らしをつくるのが願いです。

――ご家族にとっては、施設があってこそという思いの方もいらっしゃるのではないでしょうか？

佐瀬：本人が望んでの入所というのはありません。どんなに重い障がいの人でも、ご自分の意志、自分らしさを持っています。こちらに、その方の声や意思を聞き取る力がないだけのことだけです。だれにでも、自分の暮らしを選び取り、自己実現していく、そういう権利があるはずです。長い人間の歴史のなかでも「人権」という考え方が生まれてきたのは、つい最近のことです。ついこの間まで、奴隷制をもっていた人間が、「人権意識」に目覚めていくためには、教育が必要です。人間というものは、他人の目がなければ平気で他人をイジメたり排斥したり、また、悪魔のささやきのようなものに誘われてしまうこともあります。だからこそ、学校教育のなかで、福祉の考え方、人権について、たっぷり順序立てて教育する必要があると思います。

――施設ではなく地域で障がいの有無なく生きていける場をつくっていくのに、市民として何を心がけていくべきでしょうか？

佐瀬：地域の方に障がい者とふれあってもらおうと、福祉の現場にいる者からボランティアでもなんでも「すべきだ」みたいに呼び掛けるのは、傲慢だと思います。たとえば、施設にボランティアとして来てもらう、1年に1回施設で地域の方といっしょに祭りをするというようなことではなく、福祉の現場にいる者が、触れ合う場づくりを工夫してこちらからどんどん地域に出ていくことを考えるべきだと思うのです。その実践があってこそ、障がい者も同じ人間だと思う人が地域に増えていく。交流の始まりは、ここから、と考えています。それでも少しずつ時代は変わっていっている、そう思っています。

"※地域移行支援"って どんなこと？

さまざまな障がいがあって支援が必要な方に施設に入ってもらって世話するのではなく、グループホームやアパートなど、障がいがあっても地域でその人らしい暮らしができるよう支援していく考え方です。施設から街中へ。これは、福祉のあり方を目指すもので、世界的にこうした支援が求められるようになっています。

お話されるなかで、佐瀬さんが本棚から抜いて引用されたのは、小学館新書『**ヒトは「イジメ」をやめられない**』でした。福祉の現場にいる方が「人目がないとヒトは何をするかわからない」と、支援の場に監視カメラがあってもいいと言われたのには少しびっくりしました。でも、それは福祉の現場の難しさを知る自戒と矜持にも感じられたのでした。（い）

み〜つけタウン

年齢を重ねるごとに、知っていることより知らないことの方が多いと知るようになりました。知らないことに気づくたびに、知らないことでどれほど思い違いをしてきたのだろうと振り返ります。知らないために思い違いを重ねて、そのことで誰かを傷つけたり、どこかで悪意に加担したのではないかと周りを見渡すことが大切なんだと思います。
「まち」は人と出会うことであり、出会いのなかで刻まれる思い出づくりの場所だと考えるからです。知って、出会い、思い違いを廃して、気持ちよくここでずっとくらしたい。
そんな思いで、今回は、このまちの地域活動支援・介護の場所を訪ねました。たまたまだけど、知らなかった言葉を知り、知らなかった人びとと出会うことになりました。
「しょうがい」という言葉を使うにも不馴れです。なので、さまざま考えて、使われている場合はその表記のまま、私たちが使うときは「障がい」と表記しています。

どこの事業所もとってもあったか。そして、びっくりするぐらい人なつっこい利用者さんにびっくり。

知って 出会って このまちに暮らす人びと

地域活動支援センター

レモンタイム工房

南区東林間1-15-18
☎042（744）3241

「レモンタイム」の歌を指す石渡所長
その下は、色とりどりに並ぶ革工芸の作品

松陰公園につづく林の間の道をたどっていくと「レモンタイム工房」があります。隣には、グループホーム「来夢」の看板。現在、15 名の知的障がいのみなさんが通所、主に革工芸の製作に取り組んでいます。アパートの１階部分の４室をつなげてリフォームした工房には『レモンタイム〜小さな手から〜』の歌詞が貼り出されています。

――こちらの事業所の歌ですか？

はい、新町中学校の生徒さんが編曲して演奏に来てくれたこともあります。職業体験でも新町中の生徒さんが来てくれたり交流してます。ボーノにある「ふくしラウンジ」で開催されているコーヒー屋さんには革工芸の製品を売りにお店を出しています。そのほか、クラフト市に出店したり、東林地区のお祭りにも参加しています。

まず、地域の人に、「レモンタイム」の場所と存在を知ってほしいというのがいちばんです。

ここにいることを、まず知ってほしい

――存在を知られたくないのではないかと、なんとなく遠慮してしてしまう、とか、怖じてしまうところがあるのですが…。

まず、知ってもらって。何も特別じゃないのです。言葉にするなら「共生」ということでしょうが、理屈などなく、物怖じなくふれあってほしいのです。本当に、みんな待っていますから。お店を出していて、知った方に声をかけてもらうのは嬉しいです。大きなことは求めていません。ネットを見て、こんな革工芸作品がほしい、などと注文をいただくと、働き甲斐を感じます。わずかではあるけれど働いてお金を稼ぐことで社会参加できてると思えます。

やまゆり園事件のことを思うと本当につらく、障がい者もひとりの人間だと思います。確かに親御さんと支援の方法でギャップを感じることはあります。でも、利用者ご本人の気持ちをくみ取っていくことが大切です。ほら、花だって陽を向いて咲くでしょう、何の知識もなくとも、人間同士、気持ちをくみ取っていくことはできるのではないでしょうか。

ひとりの人間として出会うことから始めてください。創作活動と働く喜び、その生活の場としての「レモンタイム」。そこに集う障がい者の気持ちの引き出しを開けて、寄り添ってみてください。狭い世界のなかにいるので、利用者自身が待っています。「レモンタイム」は、いつでもふれあいを待っています。

「青い芝の会って、なに？

1957 年東京で発足して全国に広がる。脳性マヒ者の交流や生活訓練、社会への問題提起などを目的とした。ときに過激に行動して、いまだ制度も整わず、社会的理解も進まないなかで、障がい者運動をリード。彼らの行動があって交通機関への乗車の道を開いたとも言えます。「青い芝」の人々の生活と思想をカメラに収めた、原一男監督の第一作『さよならＣＰ（脳性マヒ）』というドキュメンタリー映画があります。

いろんな人がいていい――決めつけないで「どうしたらいい？」ときいてみて

中央区共和 3-8-18
☎042（759）1683

(有) 地域活動支援センター **くえびこ**

それぞれがそれぞれの過ごし方をされているなかで話を伺いました。

たぶん、障がい当事者が施設長で、運営をしているという施設は数えるほどしかないのではないでしょうか。市内ではここだけ。津久井やまゆり園事件のあった相模原だから、福祉の遅れたまち、と思い込んでいたのですが、現場の方の話を伺うう ち、相模原は、「青い芝の会」※の流れを汲み「くえびこ」が頑張って先進的な取り組みをしてきた、と耳にして「くえびこ」を訪ねました。昼下がり、思い思いの過ごし方をされている中に入れていただき、たっぷりお話を伺いました。

「くえびこ」は古事記に出てくる「かかし」の古語。「昔は障碍をもつ人々も大切な火を守る仕事や、畑に群がる鳥などを追い立てて村のために役立っていたと伝えられています。私達も社会のために何らかの形で役立つ事をめざしています。」と「くえびこ」の案内にあります。

――障がい当事者としてやまゆり園事件について声明を出されたり、集会を持たれましたが、どんな思いをお持ちでしょうか？

ひとり暮らしだとか人権だとか、これまで積み重ねてきたものが一気に崩れてしまった思いがしました。当事者としてみた場合は、これだけ犠牲の出た被害者の名前が匿名にされて、匿名を優しさとするなんてひどいと思います。ムラ社会の日本で家族が知られたくないというのは理解できるとしても、名前を出さないのはその人が生きていたことも否定することです。存在が否定されることを「優しさ」だなんて。犯人の偏った思想とその年齢を考えると、自分たち当事者がもっと自分たちの存在や人権について、もっと本気を出して、話して啓蒙していかなきゃならないな、とも考えています。

――障がい当事者が運営しているのは珍しいと思うのですが ....。

「くえびこ」の目指しているのは、どんなに重い障がいがあっても、自分の住みたい場所に住み、食べたいものを食べ、やりたいことをやる生活です。障がいの重さによっては、意思を読み取ることが難しい場合があるけど、そのときは周りの者に読み取る責任があるよね。ひとりでは必ず偏りがあるし。

自己選択、自己決定といったって、もちろん、障がい者だから支援は必要だし、選択肢は限られているけど、自己責任だけを押し付けられるのってヘンでしょう。だって、僕たちの方が圧倒的に少数者なのに、社会の方にそれを許す力が圧倒的に無いんですよ。社会が許す力を付けるといいなと思います。高齢者だって増えるし。フツーに失敗だってあるだろうし、「どうしたらいいんだろうね」って語り合う場がほしいのです。必ずしも答えや正解なんかなくていい、地域でいろいろな人と考え合える、そういう場にここがなれるといいね。

――市民として、私たちはよく耳を傾けてフツーに話し合えればいいのでしょうか？

マヒがあって聞き取りにくいかもしれないけど、聞く気があれば聞ける。それに障がい者だからといって成人君子じゃないし、あるがまま。配慮というのじゃなくて、人として扱ってほしい、ってこと。決めつけないで、僕たちに「どうしてほしいのですか」と訊いてくれればいいんです。みんなでどうやって楽に暮らしていけるかを、困っているときにその人の立場になって考えていけるといいですね。

――「くえびこ」は、当事者のホンネの聞ける、本気で生きてる人たちのスペースです。来客歓迎ですって。

ひとりひとりに寄り添うこと♥

相模原市立南障害者地域活動支援センター

南区南台 4-12-54　市営南台団地４号棟１階
☎042（701）3917

みなみ風

■施設長の堀越恵美子さんと自立支援コーディネーターの三浦幸子さんにお話を伺いました。

■南障害者地域活動支援センター「みなみ風」は、こころの病を持った方が安心して、地域のなかでいきいきと自分らしい生活が送れるように支援するところです。平成 22 年４月、市が政令指定都市になると同時に南区南台の市営団地の一角に開設されました。対象者は、統合失調症やうつ等の気分症、発達障害等、福祉サービスや医療支援の必要な方で、現在 831 人が登録しています。

■活動としては、フリースペースの利用や、相談、障害福祉サービスの利用計画の作成、社会参加のための各種プログラム、家族やボランティア支援をしています。また、食事やお風呂、洗濯のサービス（有料）もあります。

■利用者のなかには、自身のどうにもならない喪失体験から抜け出せない方もいて、そういう方々に寄り添ってかかわっていくことの難しさがあるが、久しぶりに顔を出した方から、うまくいっているという話を聞いたり、家族との関係がよくなったという話を聞けたりしたときはうれしいとのこと。

■自立支援と一口に言っても一人ひとり違うので、寄り添いながら精神的な自立へ少しでも近づけるよう対応していき、また、「みなみ風」を上手に使いながら外に向かっていく力をつけ、前進するためのきっかけをつくり、ステップアップしていってほしいと語りました。

■なお、現在市内には、緑区与瀬、中央区淵野辺、中央区橋本にも精神障害者地域活動支援センターがあります。

※HP より施設図
さまざまな部屋や設備が用意されていて利用できます。

おたがいに必要な存在　だから　事業所は街中に

社会福祉法人　県央福祉会
生活介護　**ふるーる**

南区麻溝台 699-1　☎042-711-8377

▼「ふるーる」の作業のようす。フェルトのくまさんを生かしたリースづくりは、利用者さんのアイデア。右下は、個室のようす。好みの歌手のポスターが貼ってあるのがのぞけました。

■ソーシャルインクルージョン（＝全ての人々がともに社会の構成員として包み支え合う）という言葉がありますが、利用者さんにとって私たちが必要なように、私たちにとっても障がい者は必要な存在なんです。障がいがあることをオープンにとらえれば、それは個性と同じになるし、ともに生きていく場として事業所は街中につくろうとしてきました。出会いと営みは街中にあって、ふれあいは自然に生まれるからです。県央福祉会は大きな法人ですから、街中におけるチャレンジもできます。だからこそ、失敗を怖れず、いろいろ企画してその使命を担うべきだと考えています。――そう「ふるーる」の施設長の柴田琢さんは、熱のこもった口調で語ってくれました。

■フランス語で花を意味する「ふるーる」は、「明るく！ 楽しく！ 元気に！」をモットーとしているそうです。県央福祉会のスケール・メリットを生かして、知的・精神・身体とそれぞれの障がいの個性に合わせ、生活、作業、余暇支援と多様な支援をされています。なので、入浴サービスのできるお風呂場があったり、個室や仕切りをしたスペースで過ごす人がいる一方、作業に取り組んでいる人たちもいます。

■廃油からつくる無添加石けんは人気もあって、生産が追いつかないほどだとか。フェルトでつくるかわいいクマさんも人気商品のようです。

■北里大学のお隣に位置する地の利を生かして、北里大学とのコラボにもチャレンジ中。実習生を受け入れたり学食に行ったりするだけでなく、利用者さんとともに実際に教壇に立つという試みも始まるそうです。外の目を入れるためにも、地域との連携が求められるところですが、自治会が無いので、地域地図の作成に参加していると、地図を広げてくださったのでした。

ここみせ

麻溝公園管理事務所内

マイガーデン

南区麻溝台２３１７－１

※花の写真は
中里眞美子さん撮影

～季節の花を楽しみながら　出会いを待つお店～

体育館の駐車場から
横断歩道を渡って
すぐの入り口にある
売店です。

「ふるーる」製くまちゃんの付いた菜の花リース。
リースも売店で買うことができるようになるかも・・・。

麻溝公園の管理事務所の自動ドアの手前にある売店「マイガーデン」は県央福祉会が運営しています。担当の曜日が移動したり、雨天はお休みになったりしますが、おおよそ（2018年３月現在です）、

火曜日は「ふるーる」さん
木曜日は「未来（みらくる）わかまつ」さん
金曜日は「きらら」さん
日曜日は「パステルファーム」さん

というように４つの事業所がそれぞれ利用者さんと職員さんで店番を担当して、朝10時から午後４時ぐらいまで、委託商品や自主製作の商品（ワゴンの中をのぞいてみると、かわいい小物がいっぱい）を販売しています。

「公園の売店ということもあって、雰囲気も明るく開放的なので、利用者さんも店番を楽しみにしているのですよ」と、立ち寄った日に店番されていた「未来わかまつ」の中里眞美子さん。「お客さんとの交流も楽しみで」とつづけ、「障がいをもっていても同じですよ、みな、出会いを待っています」とお話くださいました。

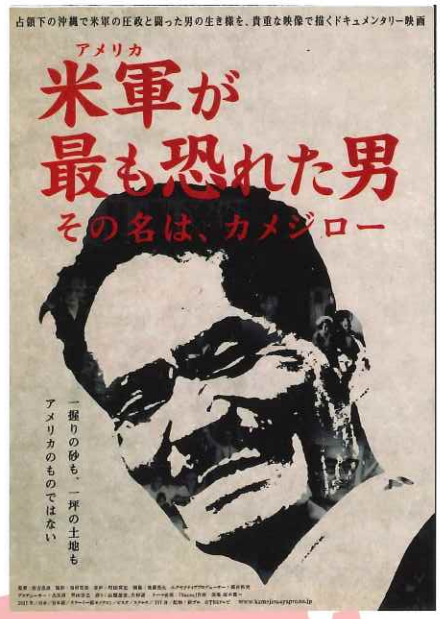
中里さん、店番するなかで公園の花々を写真に撮るようになって、写真作品展もなさったそうです。

プールや体育館、麻溝公園にも子連れでよく足を運んだのに、これまで売店に気づきませんでした。身近に出会いを待つお店があることを知って、また、春が近づいた感じがいたしました。

Information

ここdeシネマ

第10回
8月10日（金）
上映開始14:00～
場所はグリーンホール
多目的ホール
参加費1000円



筑紫哲也氏の薫陶を受けた
佐古忠彦初監督作品。
テーマ音楽は作品の主旨に
共感した坂本龍一が
オリジナル楽曲を書き下ろし。
語りには名バイプレーヤーと
賞賛されながら今年2月に
急逝された大杉漣が参加。

★現在、本作には
字幕・音声ガイドがありません。
バリアフリー上映実現に向け
手助けをお願いいたします。

字幕づくり、
音声ガイドづくりに
関心のある方
モニターをしてくれる方
ナレーターや
録音や音声編集
そして
資金援助も！
あなたの力を
お貸しください。

連絡は「ここずっと」に！

字幕・音声ガイドをつくるためには
エクセルが使えることが必須です。
私たちは、市民が字幕・音声ガイドの
スキルを持つことは
とても大切なことだと考えています。

クリップボード

津久井やまゆり園事件を考え続ける会

津久井やまゆり園で起きた殺傷事件から２度目の春を迎えます。
事件に衝撃を受け、他人事に思えず、様々な立場や考えの障がい当事者、家族、施設関係者、学者、議員、報道関係者、市民が毎月のように横浜や相模原市内で小さな集まりを持ち続けています。
大きな集まりも持ちましたが、再び立ち止まり、より多くの方々と共に考えてみたい。そのための“場”を準備中です。
この事件と地続きにある、私たちが生きる時代の正体について考え続けるために。

お問合せ先：勇気野菜プロジェクト・杉浦 ☎080-5494-3439

NPO法人ここずっとは市民相談窓口を開いています。
相談は☎042-745-0676へ。

<ここ de シネマ>は”まちづくり”を応援します。
●市民活動・イベントの告知、情報フライヤーお持ちください。お客様が自由にお取りいただけるようにします。●事業主の皆さん、お店情報コーナーを用意します。チラシ置きします。●映画好きのみなさん、オフ会企画もどうぞ。●字幕・音声ガイド制作スタッフを募っています。エクセルが使えれば参加できますよ！

『フリー情報紙 ここずたうん』No.16
［発行日］2018年4月
［発行者］NPO法人 ここずっと
〒252-0303 相模大野9-6-18
ここずたうん編集室

ご意見、投稿、記者志望者は
ここずたうん編集室へ
【TEL】042-745-0676　【FAX】042-742-0447
【E-mail】info@cocozutto.jp